世界文学全集 36

ロマン・ロラン

ジャン・クリストフ

Ⅲ

片山敏彦 訳

河出書房新社

世界文学全集 36　ロマン・ロラン Ⅲ

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和35年6月25日　初版発行
昭和44年8月1日　26版発行

定価　430円

訳　　者　片山敏彦
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　草刈龍平
装　　幀　原　弘

印　刷・中央精版印刷株式会社
製　本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座　東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

ジャン・クリストフ　Ⅲ

八　女友だち……五
九　燃え立つ茂み……一八八
第一部……一八九
第二部……二七二
十　新しい日……三八三
第一部……三八四
第二部……四二四

第三部……四九三
第四部……五三八
ジャン・クリストフへの告別……五六九
年譜……五七〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ジャン・クリストフ　Ⅲ

主要人物

ジャン・クリストフ　幼い時から音楽を愛し、不屈の精神をもったこの物語の主人公。

オリヴィエ　アントワネットの弟。クリストフの親友となり、フランスの真精神へクリストフをみちびく。

アルセーヌ・ガマーシュ　傲慢不遜なパリの大新聞の主筆。

ジャックリーヌ・ランジェー　富裕な社交界の娘。両親の反対を押しきってオリヴィエと結婚する。

マルト叔母　ジャックリーヌによい感化をあたえた老婦人。

セシール・フルーリー（フィロメール）　若い音楽家。のちオリヴィエの赤ん坊の養母となる。

フランソワーズ　有名な悲劇女優。友情からクリストフと結ばれる個性的な女性。

グラチア　かつてクリストフのピアノの弟子であったイタリー生まれの女性。美しい外交官夫人としてふたたび現われる。

ピエール・カネー　裕富な市民の家庭にそだち、革命的思想をもつ。

マヌース・エイマン　革命主義の亡命ロシヤ人。

ジュシエ、コキャール　ともに労働運動の指導者。

オーレリー　革命主義者のたまりであるカフェのやさしい主婦。

フイエットおとつつぁん　靴直し人。
エマニュエル　フイエットの孫。せむしの暗い運命からオリヴィエの決定的な感化を受け、苦学して詩人となる。
トルイヨー　フイエットの近所の紙屋。
ブラウン　クリストフの幼ななじみ。スイスで医師を開業している。

アンナ　ブラウンの妻。古い因習ゃ道徳にしばられて、暗い情熱を抱いている。
アウロラ　グラチアの娘。朗らかな少女。
リオネロ　グラチアの息子。病的で嫉妬ぶかい少年。
ジョルジュ　オリヴィエの遺児。行動的で快活な少年。

八　女友だち

フランスの外で成功が現われてきたとはいえ、クリストフとオリヴィエとの生活状態はなかなか急に良くはならなかった。窮乏へおちいることがやはりたびたびあり、彼らは腹帯をいっそうしめ直さなければならないことがまれではなかった。金のあるときには二食分をいちどきにたいらげてうめ合わせをした。しかしこんな生活法は、ながくつづけていると衰弱させるやりかただった。

目下のところ彼らふたりは勝手もとが不如意であった。クリストフはヘヒトに頼まれてするあじきない編曲の仕事を夜おそくまでやっていた。夜が白みかけるころになってやっと寝床にはいると、むだにつぶした時間を取りもどすためにぐっすり眠った。オリヴィエは朝早くから出かけるのだった。教授をするために、パリの反対の端まで行かなければならなかった。八時ごろに、郵便物をとどけにきた門番が呼びりんを鳴らした。いつもなら郵便物をドアの下からすべりこませておいてすぐに行ってしまうのだが、この朝は呼びりんを鳴らしつづけた。眠りからさめきっていないクリストフはぶつぶつ言いながらあけに行った。門番が新聞記事のことを、微笑しながらくだくだしく彼に話すのを彼は少しもききとらずに、郵便物を受け取ると、それを見もせずに、ドアを押して閉めたが、しかしかぎはかけないままにして、ふたたび寝床の中にはいって横になると、こんどはさらにぐっすりと眠りこんだ。

一時間後にまたしても、彼の室の中でする足音のために急に目をさまされた。そして彼は、自分の寝台のすぐのほうにひとりの見知らない男が立っていて丁重におじぎをするのを見てあっけにとられた。ひとりのジャーナリストが、クリストフの戸口にかぎがかかっていないのをいいことにして無遠慮に室の中まではいって来たのだった。憤激したクリストフはおどりあがるようにして寝台から飛び出した。

「ここへ何しに来たんです?」

まくらをつかんでこの闖入者へ投げつけようとした。その男は逃げ出そうとするような姿勢になった。話し合ってみてわけがわかった。新聞「ラ・ナション」の通信員が「ル・グラン・ジュルナール」に出た記事についてクラフト氏に会見をのぞんでいるのだった。

「どんな記事です?」

ではその記事をクラフト氏はまだお読みになっていられないのか？　と通信員は言い、そしてその記事の内容をクリストフに知らせようと申し出た。

クリストフはふたたび寝床にはいった。彼がこれほど眠くないのだったら、彼はその男に帰ってくれるように言ったことだろう。しかし、彼は眠かったために、かえってその男にしゃべらせておくほうが手数がはぶけた。寝台にからだを埋めるようにして、目をとじて、眠っているふりをした。これでしぜん片づいたろうと彼は考えていた。しかし相手は強硬で、つよい声を出して、その記事を読みにかかった。初めの数行が読まれるとクリストフの注意はその記事に向けられた。そこには、現代最大の音楽的天才としてのクラフト氏のことが論じられているのだった。クリストフは眠ったふりをよそおっているのを忘れてしまって、おどろきの声を出しながら寝床の上で身を起こして言った——

「気ちがいざただ。なんてことを思いついたんだ？」

通信員はこのときとばかり、読むのを中断してクリストフにいろいろな質問を出したが、それにたいしてクリストフは懸念もせずに返事をした。クリストフはその記事の出ている新聞を手に取り、第一面に大きく掲載されている自分の写真を見てあっけにとられた。しかし読んでいるひまがなかった。べつの記者が室へはいってきたからである。こんどこそクリストフは本気でおこった。そして彼らに、出て行ってくれとうながした。しかも彼らはそれでもなお、室内の家具の配置や、壁にかかっている写真類や、本人の風貌をすばやくノートに取らずには出て行かなかったが、その本人は、笑いながら同時に憤激して、ふたりを背後から押しながら、寝まきのままで戸口まで彼らについて行き、彼らが外へ出ると戸にかぎをかけた。

だがその日は人々が彼を落ちつかせておかない日なのであった。顔を洗い終わらないうちにまたもや戸口をノックする音がしたが、こんどのは親しい少数の友だちだけが心得ている、約定のノックのしかただった。クリストフはあけた。すると、こんどのもまた未知の男だったのでクリストフは即座に追っ払おうとしたが、その男は、自分があの記事を書いた筆者であることを自己紹介しながらそれをたてにとって居すわろうとした。さてそうであってみれば、自分を天才扱いしてくれた人物を追っ払うというわけにもいくまい！　クリストフは、彼の賛嘆者からそそぎかけられる感情の流露を、しぶしぶ受けているほかはなかった。彼はとつぜん降って来たこんな名声にびっくりしてしまい、そして自分の知らぬまに、昨夜何か自分の傑作が演奏されたのかしらんと心の中で問うた。しかしそのことを確かめてみる暇もなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

た。記者が来たのはえらい記者である主筆のアルセーヌ・ガマーシュ自身が、新聞の編集局でクリストフに会いたがっているので、ぜひとも即座にクリストフを連れ出して編集局まで同行するためなのであった。自動車が下で待っていた。クリストフは行くまいとした。しかし友誼的な申し出を受けるとついほだされやすい彼はけっきょく相手の言うがままにした。

十分後に、彼はだれもかれもがその前ではふるえおのののくジャーナリズムの専制君主に対面した。五十がらみのたくましい、らいらくな男で、小柄でがっしりしていて、頭が大きくて丸く、しらがまじりの毛はブラッシの毛並みのように短くかられており、顔はあから顔で、言葉づかいは威圧的であり、おもおもしく力をいれたアクセントで、まくしたてる雄弁な話しぶりだった。彼はとてつもなく大きな「オートゴビスム（自己信頼）」によってパリを威圧していた。人々を管理する才にたけている手腕家であり、エゴイストで、直情径行と抜けめなさとをかね備えており、熱情的であって自負心にみちている彼は、自己の利益はすなわちパリの利益、いな人類の利益とさえ思いこんでいた。彼の利益と彼の新聞の繁栄と「サルス・プブリカ（一般の福祉）」とは、彼には同質のものであり密接に結び合っているものと考えられていた。彼は、彼に向かって不都合なものはフランスにたいして不都合なものであると信じて少しも疑うところがなかった。彼一個人にとっての敵をやっつけるために必要とあらば、彼は国家組織を混乱させることもしかねない男だった。しかもまた彼は雅量をもつこともできるのだった。満腹しているときにはだれでも理想論者であるものだが、彼もその種の理想論者として、父なる神の流儀で、ときどき塵あくたの中からあわれな人間を拾いあげることによって自分の威力の大きさを証明してみることに楽しみを感じていたが、この彼の威力たるや無から一光栄を作ることができるものであり、大臣たちを作り出すばかりか、もしも彼がそうしようと望めば、王たちを作り出したり廃止したりもできるはずのものであった。彼の権能は全般に通じていた。彼がその気になれば天才たちを製造することさえやるのだった。

この日彼はクリストフを「製造」する仕事に着手したところだった。

*

そんな気もなしにその先鞭をつけていたのはオリヴィエであった。彼は自分自身のための奔走はほんの少しもせず、自己宣伝を唾棄し、そしてジャーナリストたちをペストのように避けているくせに、ことがらが自分の友のことだとなると、別種のやりかたを自分の義務だと

感じるのだった。その点においては彼は、ならず者であるむすこらに何かの恩赦を得てやるために身売りをする、愛情ぶかい母たち――元来は非のうちどころない妻であり、中流家庭の貞淑な夫人である、そんな母たちに似ていた。

オリヴィエは雑誌に書き、また多くの批評家たちや芸術愛好者たちと絶えず接触があったので、クリストフについて語る機会を一つも取り逃がさないようにしていた。そして彼は自分の意見が人々に受けいれられているのを知って最近びっくりさせられていた。文学界と社交界との中にだんだんひろがりつつある一つの好奇心の波動と一つのふしぎな評判のざわめきとを、オリヴィエは身のまわりに感づいていた。その原因はなにだったか？近ごろ英国とドイツとでクリストフの作品が演奏されたばあいの新聞の反響がそれだったのか？　それが確かな原因だとも思えなかった。そこには、人気を感づくことの早い、そしてサン・ジャック塔の気象台よりももっと敏感に、一日前から風向きを知り、翌日その風がどんなぐあいになるかを予感する、パリのもの見高い人々ならよく知っている、そんな現象の一つが見られるのだった。電流みたいな戦慄がいくつも流れているこの神経過敏な大都会の中では、目には見えない名声の波動が存在し、有名になるに先だっての潜在的名声というべきものが存在し、客間のなかでのおぼろな評判――Nescio quid majus nascitur Iliade（イリアードにまさるものが現われた）――が存在する。そしてそのおぼろな評判は、やがて時期が来るととつじょと広告の形をとって世にあらわれ、新しい偶像の名を、最も無感覚な耳のなかへも吹きこむらっぱの大きな音になって鳴りわたる。ところがかえって、こんな大げさな宣伝的賛辞は、この賛辞が向けられているその人の最初の、そして最良の味方である友らを引っこませる結果になる。しかもそんな結果をまねいた責任はその友らにある。

そんなわけで、「ル・グラン・ジュルナール」に出た論文ももとをただせばオリヴィエの尽力がまねいた結果だった。彼はクリストフのために有利だと思われるどんな機会をも逃がさなかったし、巧妙に告げ知らせることによって、そんな幸運の熱を冷却させないように心がけていた。とはいえオリヴィエは、クリストフを直接ジャーナリストたちと関係させないようによく気をくばっていた。ばかげたけんかが起こるのを彼は心配していたのである。しかし「ル・グラン・ジュルナール」の求めによってオリヴィエは、クリストフの知らないまにこっそりと、あるコーヒー店でクリストフがひとりの通信員と会見する策をこうじていた。こんなすべての慎重なやりかたが人々の好奇心を刺激して、クリストフにたいする興

味をあおりたてることになった。オリヴィエはそれまでクリストフをやたらに宣伝するようなことはぜんぜんしていなかった。彼は自分が大きな一つの機械をうごかし始めており、そしてそいつがひとたび動きだせばもう統御することも引きとめることもできないのだということまでは夢にも思っていなかった。

彼は講義に行く途中で「ル・グラン・ジュルナール」の記事を読んだときもをつぶしてしまった。こんな不意打ちは予想外だった。新聞がクリストフのことを記事にするとすれば、それに先だってまずあらゆる記録的材料を入手して記事の正確を期することだろうとオリヴィエは思っていたのである。これはあまりにも愚直な考えだった。もしもどれかの新聞がひとりの新人を発見してそれを評判にすることに尽力するとすれば、それはもちろん新聞自身のためであり、したがって、その発見の名誉を他の新聞に奪われないためである。だからぐずぐずしてはいられない――自分が賞賛するものについて自分がまるで理解をしていなくても、そんなことはかまいはしない。しかしそのことについて、ほめられる当人が不服を言うこともまれだ。――ほめられているなら、もうそれで十分理解されているというわけで。

「ル・グラン・ジュルナール」はクリストフの不幸な境涯についていろいろとばかげた物語を売りさばいていた。クリストフをドイツの暴政の一犠牲として見なし、自由の使徒と見なしていたが、この自由の使徒は、帝国主義的ドイツから脱出して、フランスへ――すなわち、自由な魂をもつ人々が安心して生きることができるフランスへ――（〔フランスの〕盲目的愛国主義者らにていさいのいい口実として役立つ文句である！）――隠れ家を求めて来ないではいられなかったと、そんなふうに書いたあとで、クリストフの音楽的天才をやたらにほめているのだが、しかもその音楽的天才については何も知ってはいないのだった――知っているのはただ、クリストフがドイツで音楽家として出発した最初の時期に作曲したいくつかの平凡な歌曲だけであり、それらは現在のクリストフ自身が恥ずかしさを感じて取り消してしまいたいような作品だった。しかし、その記事の筆者はクリストフの作品について無知だったとはいえ、彼はその無知を、クリストフのいろいろな作曲計画についてしきりと書くことによっておぎなっていた――そんな作曲計画たるや、それは記者が勝手に想像して作りあげたものだった。クリストフあるいはオリヴィエが言ったことのあるいくつかの言葉――それに加えて、クリストフの音楽の精通者たることを自任しているグジャールという人物の言葉まで引用することによって、「共和主義的天才――民主主義の偉大なる音楽家」ジャン・クリストフの姿を

組み立てることがその記者には十分できたのだった。記者はこの機会を利用して、現代フランスの作曲家たちをこきおろしていたが、とりわけ、民主主義のことではほとんど心をわずらわしていない最も独創的で独立的な作曲家たちがやり玉にあげられていた。ひとりかふたりの例外をあげていたが、それは選挙に関するこの作曲家たちの政治的意見が記者にはりっぱなものと考えられるからだった。ただし、その作曲家たちの作る音楽が彼らの政治的意見ほどにりっぱでないのはざんねんなことである——しかしそれは第二義的なことである、というわけだった。概して、この記者の賛辞は、これらの作曲家への賛辞も、そしてクリストフへの賛辞さえも、他の作曲家たちへの非難に比べると重要性が少ないのだった。だれかについていくらか好意を示している論説をパリで読むとき、人は常に次のような問いを自分の心に出すことを心がける必要がある——

「このほめことばと対照的にけなされているのはだれなのかな？」

新聞記事の全文に目を通すにつれてオリヴィエの顔は恥ずかしさのために赤くなり、そして心の中で言った——

「これこそぼくには骨折り損のくたびれもうけというやつだ」

講義をしに行くのも気がすすまなくなった。そして講義を終わるとすぐに帰宅した。だが、すでにクリストフがジャーナリストたちといっしょに外出してしまっているのをオリヴィエが知ったとき、彼のおどろきはなんと大きかったことか！　彼は昼の食事をいっしょにしようと思ってクリストフの帰るのを待っていたが、クリストフは帰らなかった。そのうちに彼の不安はだんだんつのってきた。彼は思った——「彼らはクリストフにとんでもないことを言わせてしまうにちがいない！」

三時ごろにクリストフは帰ってきたがまったく快活な様子だった。彼はアルセーヌ・ガマーシュと午餐をともにしてきた。そして飲んできたシャンペン酒のために頭がいくらかもやもやしていた。クリストフがしゃべったことやしたことについてオリヴィエが心配そうに彼にたずねたとき、クリストフはオリヴィエがなぜ心配しているのか、がてんがいかないのだった。

「ぼくが何をしたかって？　すてきな午餐だったよ。ぼくには久しぶりのごちそうだった」

彼はオリヴィエにどんなごちそうが出たかを逐一話した。

「それからぶどう酒はね……あらゆる色のやつを飲んだよ」

オリヴィエは話をさえぎり、そしてクリストフに、ど

んな人々と同座したのかを話させた。
「どんな人々がいたかって？……ぼくにはわからないね。ガマーシュがいたよ。まったくあっさりして率直そのものみたいな人物だ。あの記事を書いたクロドミールは愉快な若者だ。ほかにぼくの知らない三、四人の新聞記者がいたが、ぼくへの態度がみんな朗らかで、善良で、感じがよかった。じっさいすてきな人たちだったよ」
　オリヴィエは、そんなことは信じられないという顔つきをした。クリストフには、オリヴィエがさっぱり感激しないのが意外だった。
「きみはあの論文をまだ読んでいないのかい？」
「読んだよ――たった今。そしてきみはあれをよく読んでみたかい？」
「うん……というのは、一応読んだんだ。ゆっくり読んでるひまがなかったんだ」
「それなら、まあもう少しよく読んでみたまえ」
　クリストフは読んだ。最初の数行を読むとふきだして大笑いをして――
「ああ！　ばかなやつ！」と彼は言った。
　はげしい笑いに身をくねらした。
「まったく」と彼は語をつづけた――「批評家というやつはひとりのこらずどんぐりのせいくらべだ。彼らはぜんぜんわかっていないんだ」
　しかし読み進むにつれて彼はおこりだした。こいつはひどすぎる。自分をおかしなものにして見せている。自分を「共和主義の音楽家」扱いしようとするのはまったくナンセンスだ……まあこの見当はずれは見のがしておくとしよう……しかし彼を「共和主義の音楽家」と見なすことによって彼の音楽を、昔の巨匠たちの「聖堂音楽」と反対のものとみるのは、こいつはあまりにひどすぎる――（自分は、あの偉大な人々の魂によってこそ養われたのだ）……
「ひどい白痴どもだ！　彼らはぼくをとんでもない白痴に仕立てあげようとしている！……」
　それから彼をもてはやす機会に、フランスの有為な作曲家たちをこきおろすとはどういうことか？　それらの有為の人々を彼は多少とも愛している――（多く愛しているというよりはむしろ少なく愛しているのだが）その人々は、とにかく自分の専門の技を身につけており、その仕事の名誉になることをしている。それから最もいけないことは、クリストフが彼の祖国にたいしてひどい憎しみの情をもっているかのように筆者が仮想していることである！……いや、これはがまんのならないことだ……
「ぼくはすぐ彼らに手紙を書く」とクリストフは言った。
　オリヴィエは制した。

「いや、今はいけない！　きみは興奮しすぎている。あすになって頭がしずまってからにするがいい……」

クリストフはきかなかった。彼は何かを言おうと思い立つと待ってはいられなかった。手紙を書いたらそれをオリヴィエに見せるという約束だけはオリヴィエにした。この約束を守ったことは無益なことではなかった。ドイツにたいする彼の態度について、あの記事が捏造した考えを訂正することにとりわけクリストフが苦心したその手紙を、彼は適当に書き直した後に急いでそれをポストへ入れに行った。もどって来て彼は言った――「不幸中の幸いというものさ。今の手紙があすの新聞に出るだろうから」

オリヴィエは、疑わしいというふうにかぶりを振った。それからやはり気にかかるので、彼はクリストフの目を見つめながら問うた――

「クリストフ、きみは食卓で、不用意なことは何も言いはしなかったろうね？」

「言うもんか」とクリストフは笑いながら言った。

「たしかだね？」

「たしかだよ――きみは気が弱いな」

オリヴィエはいくらか安心した。だがこんどはクリストフが心配になりだした。今になって思いだしたのだが、彼は、まったく不用心になんでもかでもしゃべってきたのだった。彼の気持ちはすぐにくつろいでしまっていたのだった。一瞬間たりとも同席の人々に不信の念をもつことがなかったのだ。みんなが彼にたいしてまことに真情と好意とをもっていると彼には思われたのだ！そしてじっさいそのとおりではあった。人はいつでも自分のためになることをしてくれた人間には好意をもつ。それにクリストフがほんとうの喜びを外へ現わしたものだから、その気持ちは他の人々にも伝わったのであった。愛情のこもっている無遠慮さと、陽気でとっぴなじょうだんと、とほうもない食欲と、そして矢継ぎばやに飲んでも自若としているクリストフの態度とがアルセーヌ・ガマーシュには愉快ではないわけではなかった。ガマーシュもまた、じょうぶで野人的で多血質であり、食卓での豪の者であって、それゆえ、虚弱な連中、食う元気も飲む元気もない連中、ひょろひょろのパリ人どもを彼は大いに軽蔑していた。ひとりの人間についての評価を彼は食卓できめるのだった。彼はクリストフを高く評価した。即座に彼はクリストフに、クリストフ作の『ガルガンチュア』をオペラとして上演したい、しかも「オペラ座」で上演したいと申し出た。（当時のフランス市民層の人々にとっては、〔ベルリオーズの〕『ファウストの劫罰』や〔ベートーヴェンの〕『第九交響曲』を舞台にかけることが芸術の極点だと思われていた）――こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb